

## ぶどう園の農夫のたとえ

聖書 マタイによる福音書第21章33～46節 讃美歌 497 521

説教 森田幸男牧師

聖書の中では、「ぶどう」とか「ぶどう園」のことがよくたとえに用いられます。今日の箇所は、『ぶどう園の農夫』のたとえということになっています。たとえですから、何もかもびたっと当てはまるというわけではありません。それが譬えの限界であります。今日のたとえにおいては、このぶどう園の主人というのは神様のことであります。そしてぶどう園は神の民イスラエルのことであります。ぶどう園の農夫たち或いはぶどう園の管理者と言ってもいいのですが、それらはイスラエルの民の指導者たちであります。

今日の箇所の45節を見ますと、祭司長たちやファリサイ派の人々、そして前にも言いましたが、ここには律法学者や長老たちもいたのですが、この人々はこのたとえを聞いて、イエス様が自分たちのことを言っていると気づいたとあります。ここではイスラエルの民の指導者たち、祭司長、律法学者、長老たちがこのぶどう園の農夫にたとえられています。そしてぶどう園の主人は収穫期が来たので僕たちを遣わします。この遣わされた僕たちというのは世々の預言者たちを指しています。

ところが農夫たちは送られた僕たちを袋叩きにし、殺して、納めるべきものを納めなかったというのです。そして更に多くの使者を遣わしたけれど同じような目に遭わせた。そこでぶどう園の主人は自分の息子を送りますが、「これは跡取りだ。これさえいなければ、このぶどう園は自分たちのものになる」として、その息子も捕まえて殺したというのです。この息子は、イエス・キリストを指しています。

この譬えでは農夫たちが悪者ですが、その当時もいつの時代でもどこの国にも、実際に見られることがたとえに用いられている。そしてそういうことはイエス様も当時の見聞として頭にあって、こういうたとえをされたのでしょう。つまり、この現実社会には悪質な雇い主とか主人が多いわけであり、非常に厳しい取立てをする。労働者に僅かな賃金しか払わないでこき使う。時には働かすだけで給料を与えないという悪質な雇い主もいるのであります。しばしばホームレスの人たちに聞かされるのはそういうことです。仕事がほしいですから雇ってくれるなら喜んでいくのですが、たこ部屋のような所に入れられて、給料は後払いです。そして結局働かせられて、仕事が終わった時には殆ど持って帰るお金はない。そのために代って給料を取りに行ってくれる人も西成には実際にいるのです。勿論、取り立て料は引かれます。ホームレスの人たちも、給料を少しずつ積み立てていって、自立、独立すればいいのにと私たちは思いますが、なかなかそうはいかないのが現実です。そういう悪質な雇い主、資本家はいつの時代にもいます。それにたまりかねて反逆する農夫や労働者たちがいてもいいわけですね。それが国レベルで起これば、革命ということに

もなるのですが、反逆する方に理がある、義があるということもやはりあるのであります。

今日のたとえの場合は、イエス様在世時のイスラエルの指導者たちは、この世で見られるそういう悪質な管理者で、そして彼らは管理者以上ではないのですが、資本家然とした態度を取っていた。つまり、彼らはあくまでも神様から人々を養う務めを託されているのですが、神様に帰するものを帰さないで、略奪しているという状況でありました。

今日のたとえ話は、会堂でイエス様がなされたものではありません。これは前の頁の21章12節以下に“神殿から商人を追い出す”とあり、いわゆる「宮清め」をイエス様はなされたのです。「この神殿は全ての人の祈りの家なのだ。ところが、あなたたちはそれを強盗の巢にしてしまっている」と糾弾されました。そういう事があって、当局者の祭司長とか律法学者や長老たちが、そういう乱暴狼藉は許せないと、神殿を汚すイエスを捕らえようとしてやって来たのです。その時に、イエス様はこのたとえをされたのです。

そういう意味において今見ました21章12節以下の「宮清め」の行動というのは、大事な意味を持つわけであります。神殿は、或いは教会はと言い換えるならば、それはすべての人の祈りの家として、人々を神の国の祝福に導くべき責務があるのです。また、神に喜ばれる実を生み出していかなければならないわけであります。ところが、その託された務めを果たしていないとイエス様の目に映ったのであります。それゆえの宮清めであり、また今日のたとえであります。従って宮清めの行動、今日のたとえとは、片方は行動であり片方は言葉ですが、それは同じことを問題にしていると読まなければならないと思います。ですから直接的には当時の祭司長たち、イスラエルの指導者たちに向けられているのでありますけれども、先日来繰り返し申しますように、それはまた同時に聖書が書かれた当時の教会の事情とか、教会の自己反省でもあるし、またその当時の政界や財界の指導者を念頭においてこの部分が記されていると、そういうふうにも言うこともできるわけです。そして今この聖書を読んでいるのは私たちであります。これはたとえの一つの特徴でもあるのですが、今日のたとえの射程距離は遠く、広いのです。読む立場、或いは語る対象によって違って来るわけですね。そういう点で、私たちは自分自身に向けての事として、いつの場合でも聖書を読まねばなりません。

そういう意味で二、三、焦点を合わせてお話しいたします。一つは、神の配慮と忍耐についてであります。43節に、「だから、言うておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる」という厳しい言葉があって、“もうお前たちには任せない”と言われます。しかしそれに先立つ神様の配慮と忍耐を覚えます。たとえの始めのところに、「ある家の主人がぶどう園を作り、垣を巡らし、その中に搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た」とあります。つまり段取りは全部主人がしているのです。ひどい場合は、掘れば石ころや岩石しか出てこない荒地を貸して、過酷な取立てをすることもありますが、この主人の場合、至れり尽くせりの段取りをして、農夫たちに貸しているわけです。そして収穫の時が来たのですから過酷な取立てということではなかったと思うのです。これだけの事をする主人ですから。と

ころが農夫たちは、その主人に帰すべき物を帰さなかった。そして農夫たちはその使者を袋だたきにし、一人を殺し、一人を石で打ち殺したと。当然主人は遣わした者たちがいつ帰って来るか見当はつくわけですが、その時がきても戻って来ないので不審に思って、主人はまた次の使いの者たちを、前よりも多く送ったのです。それでも前と同じような目に遭わせたということは、農夫たちが結束して武闘集団にもなっていたということです。そういうところに当時の悪質な所有者の影がちらほらうかがえます。そこでこの所有者は、自分の息子を送れば敬ってくれるだろうと思ひ送ります。ところが、その息子も殺したというのであります。このような雇い主、所有者というのは現実にはいないかもしれません。

少し前に読んだマタイによる福音書 20 章の 1 節以下に、『ぶどう園の労働者』のたとえがあります。こちらの方を私たちはよく覚えているかもしれません。要するにぶどうの収穫期が来ました。常時雇っている人だけでは足りないので、季節労働者を雇うわけで、この主人は夜明けに、9 時に、正午に、3 時に、夕暮れの 5 時に広場に行き、人々を雇ったという話です。このたとえと今日のたとえと併せて読みますと、この主人の心が見えてきます。一人一人に職を与え、段取りをし、働いてもらいたい。これほどの配慮と忍耐をもって、人々の実りある働きと暮らしを望んでおられるのが偲ばれるたとえであります。しかし、現実には彼らは悪しき指導者に成り下がっていたのであります。

ところで私たちは、他の人のことはよく見えるし、的確に判断し、批判はできるのですが、自己批判とか自己変革ということになると人間というのはからきし駄目なのだということ今日この箇所を読んでも思わせられるのです。40 節を見ますと、「さて、ぶどう園の主人が帰って来たら、この農夫たちをどうするだろうか」と、イエス様は祭司長や律法学者や長老たちに問われます。すると彼らは言った。「その悪人どもをひどい目に遭わせて殺し、ぶどう園は、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに貸すにちがいない」とこのように的確に答えています。この時はもう自分のことは忘れています。キリストのたとえに引き込まれたようなのです。彼らはキリストを捕まえて亡き者にしようと迫って来たのですが、このたとえを聞き、そして質問されたら、もうわが事も、キリストのことも忘れて、「そんな悪質な奴らは殺されても仕方がない」と言っているのであります。

そして 42 節は詩篇 118 篇からの引用であり、また 44 節はイザヤ書 8 章からの引用ですが、イエス様はこういう話をなさるに及んで、祭司長やファリサイ派の人々はこのたとえを聞いて、「イエスが自分たちのことを言っているのに気づいた」のであります。けれども群衆を恐れて、イエスを捕らえなかったとあります。

ここを読んできて、私たちは「悔い改め」ということを言うし、求められるわけですが、先ほどは自己変革の難しさということを行いましたけれども、悔い改めることの困難さと、悔い改めるといのは、実に自分に死ぬことなのだ。そういう悔い改めが私たちに求められているのだと思ひました。彼らは、これは自分たちに向けて言われているとは気づいたのですが、その中身のメッセージは聞いていないわけです。自分たちに当てこすって言っているとは分ったのですが、その言われている中身は自分のこととして悔い改めるに至ら

なかったのです。亡き者にされないといけないのは、キリストではなくて自分なのだ、というふうにはこのたとえを聞かないし、或いは私たちが聖書を読んでも、そういうふうに当てはめてそれを実行するというを私たちはしない。それ故に、神の国、神の祝福から遠いものになっているというのが、私たちの現実ではないでしょうか。

ここの42節は詩篇118篇の22節～23節の引用ですが、この詩篇はパウロが正に自分の悔い改めのために引用している詩篇です。今日は時間がありませんので見ませんが、彼はローマの信徒への手紙8章に引用しています。どうぞお読みください。その詩篇118篇は、「死んだ者を甦らせる神の恵みと慈しみ」を語っているのです。人間は自分の罪の故に、自業自得で窮地に陥るのです。死なざるを得ない。けれども神の恵みと慈しみは死人を甦らせるところの恵みであり、慈しみだと語るのが詩篇118篇です。

そして今日の44節は、ここだけではちょっと分り難いと思いますが、「この石の上に落ちる者は打ち砕かれ、この石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう。」要するにこの「石」というのは、42節のところの『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。これは、主がなさったことで、わたしたちの目には不思議に見える。』この人々に捨てられた石は、イエス様のことを指すのですが、それが新しい神殿、新しい信仰のあり方の本当の隅の親石になったわけですね。ですから44節の「石」も当然イエス様のことを言っているのですが、「この石の上に落ちた者は砕かれるし、この石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう。」この石にまともにぶつかれば、つぶされない者はいないのだということでもあります。これはイザヤ書8章の13節～14節の引用ですが、その段落は、「神のみを畏れよ」という小見出しが付いています。

イエス様は神に従って生き、殺されたのです。けれども、死んでよみがえらされた。正にそのキリストにぶつかればただでは済まないわけです。祭司長やファリサイ派の人たちもただでは済まなくなるのです。今日の箇所のメッセージは、キリストにまともにぶつかれば、何人もただでは済まない。自分の命がなくなる。けれどもそれで終らない。正に死んでよみがえる。これまでの自分が崩され、滅ぼされ、そこを経て、再生する。聖書が言う「悔い改め」は、そういうレベルのことなのです。ちょっと何か手直しをするという程度のことではないのです。そしてその悔い改めを迫られているのは他の誰かではなくて、私たち各自だということなのです。

ところがこの祭司長や律法学者たちは群衆を恐れて、イエス様に手を出さないのですね。イエス様の言動に聞き、神のみを畏れ、神のみに信頼するならば、自分の立場も命も一度はなくなってしまう。しかしそれを我が事として認めて、受け入れて自分に死ぬ時に、朽ちない命と祝福の未来が開かれる。それが今日の聖書の私たちへのメッセージなのです。

お祈りいたします。

神様。どうか私たちが常にイエス様を見上げ、イエス様が示される業と言葉にこの身を託し、どうかあなたが備えたもう真の祝福と命にあずかることができるようお導きください。

この祈り、イエス様の御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン